
世界に触れながら

モヨ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

世界に触れながら

【コード】

N0489Z

【作者名】

モヨ

【あらすじ】

初心者の私が詠む短歌集です。

季節の移り変わり

見えたもの

気付いた事

抱いた気持ち

世界に心が触れた瞬間を、三十一文字の短歌に込めました。

詠んで景色や心情がリアルに蘇るような歌が詠めたらいいと思います。

1・2010年、秋の歌

『雨降れる 朝の駅舎の 蒸し暑さ 愛し人より 秋ぞ恋しき』

九月七日は朝から細かい霧雨がふっていて、駅について立ち止まると一層蒸し暑さを感じました。なかなか残暑は去ってくれません。好きな人よりも、今この瞬間は涼しい秋が恋しい！
あの日は、それくらい不快指数の高い朝でした。

『家を出て 歩く小川の 散歩道 懐かしく思う 昨日の暑さ』

九月の中頃、ふと気付く季節の移り変わり。
あれほど辛く鬱陶しかった暑さも過ぎればただただ懐かしいものです。

『窓のそば 感じる空気の 冷たさは 心安らぐ 恋しい秋かな』

夏、ギラギラと太陽の照りつける南向きの窓は、決して居心地の良い場所ではありません。

そんな窓ガラスの向こうから、ある日ひんやりとした空気が微かに流れてきて、

いよいよ私の大好きな季節が来たのかとワクワクした秋の朝でした。

『冷房は 消えて静かな 電車にて 涼しく秋を 感じる夕暮れ』

電車でふと妙な違和感に気付きました。車内がとても静かなんです。人の小さな話し声がよく響くので、私は冷房の音が消えた事に気が付きました。

確かにその日の夕方は気持ちいい秋風が吹いていました。

2・2010年、恋の歌

『あなたへの 気持ちは絶えぬ ままなのに あなたの便りは 絶えて久しく』

三年間、片思いをしていた人がいました。
去年彼は東京に行ってしまった、疎遠になって、ついにはメールも来なくなりですが
それでも私の気持ちは絶えてくれません。

『地を覆う 草の根よりも 深くある 私の恋は 苦しくも枯れず』

広い範囲に深く根を早す雑草つてあるじゃないですか。
あれを抜くのつて、すごい力があるんです。

ついにはカマでほじくり出すんですが、私の恋も雑草のようでした。
周りに「もう諦めなよ」と言われても諦められず、深く深く根をは
つて

微動だにできなかつたあの頃です。

『追いつかない　あなたが生きた歳月と　埋まらない距離に　途方にくれる』

実はその片思いの相手がすごい年上の方でした。
ジエネレーションギャップなんて関係ない！と、普段は強がっていましたが、
やはり一緒にいると悔しい瞬間があったんですね。

『駅で見た　あなたの帽子　山吹色　声もかけられず　弱い私は』

ついに告白して、見事玉砕。

その数週間後に電車で彼を見かけました。
でも声もかけられずに気づかないフリをしてしまいました。
私をつつた時「普段通りでいたい」と言ってくれたのは彼の方だったのに、

弱虫な私は友人にしこたま叱られてしまいました。

3・2010年、雑の歌

『別れてや それぞれの明日へ 向かう友 幸せであれと 願ってはやまずに』

友人で集まってそれぞれの悩み事を語り合ったあと、

「バイバイ」と各々の帰路につく私達。

みんな違う道だけど、みんな幸せになればいいなと願っています。

『秋の夜の 愁いがつのる 静けさを 打ちて壊さん 二人の漫才』

芸人さんが大好きです。

一人寂しい秋の夜に、賑やかな漫才は最高の特效薬。

二人の掛け合いを夢中で追ってる間は、悩み事なんて忘れていきますから。

『輝いて いずれ光は 朽ちるとも 思い出だけは 朽ちず絶えな
ん』

いつか光が消えるように、もし栄光の舞台から降りるときがきても
輝いていた過去はずっと消えずにそこにある。
あつて欲しい…そんな願望もこめています。

『夜もふけて 笑い声ひびく 有楽町 猥談もみな 月に消えゆく』

これはオールナイトニッポンを聞きながら詠みました。
ニッポン放送のある有楽町で繰り広げられるシモネタ（笑）
他愛もない話だからこそ、瞬間的に面白く日本中に広がって、
朝には月が消えるように、私の心からも薄れていくのです。

『わるばやし まもりばやしに おきばやし わかちゃんぴんと
ぴんくのかすみん』

オードリーのオールナイトニッポンを聞いてる方なら分かるかと…。

4・2010年、冬の歌

『秋雨に 散るは黄金の 金木犀 香りは消えて 寒さが満ちる』

冷たい雨のあと、落ちた金木犀の花で道がオレンジ色に染まります。ただどあの甘い香りはなく、変わりに寒い冬の空気が満ちていくのです。

『イブの日は 一人気ままな 自由な日 わずかに寂しさ 心をたたく』

一人で過ごすことが決定したクリスマスイブ。

こうなったら好きな物食べて、好きなテレビ見て、とことん自由に過ごそう！

そう決めていた私ですが、やはりふとした時に寂しさが心をノックしてきます。

『師走の日 慌ただしさに 追われては 空の色さえ 記憶にあらず』

年末の日々は忙しすぎて、昨日が曇りだったか晴れだったか、それすら思い出せなかった12月のある日でした。

『朝日さす 凜と冷たい 冬の朝 新たな年を 待ち焦がれてる』

大晦日に詠んだ歌です。

故郷は雪深い街なので、一人暮らしのアパートよりもっと寒くて…
そんな2010年最後の朝に、新年の訪れに心を弾ませました。

5・2011年、新春の歌

『発つ朝に 故郷の固雪 キラキラと 心もおどる 新たな年かな』

実家を出て駅に向かう車の中で詠みました。

水田は一面の銀世界、気温の低下で固まった雪がキラキラ朝焼けに光っていて

新しく始まる一年に心おどらせていました。

『毛布さえ 足に冷たい 夜だから かくしきれない 寂しさつ
の』

実家からアパートに帰ると、必ず少しだけホームシックになります。普段はぬくぬく暖かい毛布すら、足に冷たくて、より寂しくなる。

確かオードリー若林さんの『豚汁と毛布だけはいつも優しい』みたいな発言(?)を受けて、

それに対して私の毛布は…みたいな感じで詠んだ歌だったと思います。

6・2011年、東日本大震災

『寒空を 無心で歩いた 三時間白い世界と ガスの匂い』

地震が起きて交通網は全滅。当時職場にいた私は、国道を歩いて帰りました。

しかしあの日はまさかの大雪で、何故この日にこの雪!?!と…
真っ白い世界をひたすら歩きました。

でも途中で晴れたんですね。

さっきまでの吹雪が嘘みたいに風が止んで、青空が広がって…。

そしてはじめて周辺がガスくさいのに気付きました。

ヘルメットをかぶるたくさんの人とすれ違いながら、家路を急いだ震災当日のこと。

『真夜中に遠く聞こえるラジオの音間違いであれと強く願った』

避難所では人々がそれぞれラジオを聞いていました。小型テレビをつけてる人もいました。

私の周りにはラジオを持つてる人がいなかったので、

遠くに聞こえる微かなラジオの声に耳をすましていた夜中のこと。あるニュースに避難所が一瞬ざわつきました。

「荒浜で200〜300の…」私にとっても衝撃的でした。

荒浜は私もドライブで連れて行ってもらったりした場所です。

そこがそんな悲惨な状況だなんて嘘だと思いました。

夜中だから誤報が流れたんだと思いました。

後に、更なる被害が明らかにはなりますが、この時はまだどれほどの被害なのか

誰も把握していませんでしたからね。

『朝五時半 日の出を伝える ラジオの声 溢れる喜び 感謝の気持ち』

避難所の夜は寒くて長くて、何度もくる揺れのために眠れませんでした。

夜明けはまだかと、せめて明るくなってくれたらと、心待ちにしていた時…

ラジオから女性キャスターの夜明けの時間を告げる声が聞こえました。

やっと明るくなるんだって思ったら涙が出てきて、あんなに夜明けが嬉しいかったのは初めてです。

『避難所で 初めて目にした 新聞の 悲惨な事実には 涙を飲み込む』

上にも書いたように、被災地はひたすら情弱です。

私も震災後、何が起きたのかハッキリ知ることができずに、戸惑いました。

ある避難所を訪れた時、新聞が張り出されていて、それを読んで津波の被害を知り、思わず涙が溢れそうになりました。

『生きる糧 配るご飯の 暖かさは 改めて知る 元気の源』

トロい私は残念ながら避難所で配給にありつけなかったのですが、ご飯を貰って笑顔になる人を見ながら、やっぱり生きる基本は食なんだなと改めて思いました。

体の問題だけじゃなく、食えることは気持ちも救うんですね。

震災後、街ではお弁当を売る店がたくさんありました。

安くはなかったけど、買った人はみんな嬉しそうで、実際私も嬉し

くて、

飲食に関わる仕事の素晴らしさをひしひし感じたのです。

7・2011年、師走の歌

『朝ぼらけ冬が満ちるほど闇深く灯りをつけて支度をはじめる』

久しぶりに早い時間に目覚めると、辺りの暗さに驚く冬の朝。

朝だというのに部屋の電気をつけて、背中を丸めながら支度を始めます。

『この冬の始めに出会った粉雪は狐も驚く青空の下』

今年の初雪はお天気雪でした。

晴天からちらほら粉雪がふってきて、狐の嫁入り冬バージョンだなあと空を見上げました

冬も狐の嫁入りがあるかは分かりませんがね。

『冬の里寒さ厳しく満ち満ちて街はますます派手に色づく』

百人一首の「山里は冬ぞ寂しさまさりける」になぞらえて。

田舎の冬はあんなに寒々しいのに、都会の冬はイルミネーションに彩られて

他のどの季節より輝いてるから不思議です。

冬は街のギャップが激しい季節。

『海沿いを冬に連れられ旅行けば瓦礫を包む優しい粉雪』

この間、仕事で東日本大震災の被災地に行きました。

当日雪は降っていませんでしたが、本格的に降り出す頃、

この道端の瓦礫を隠すように降り積もるのかなあ…と思い詠みました。

『かじかんだ指先と頬と鼻先も赤く染めてく冬の木枯らし』

小さい頃から寒くなると動揺のトナカイさんばりに鼻が赤くなる私。
仙台の冬は風が強いので、指から頬から赤くなってしまいます。

8・2011年、被災地の夏

目次としては時間が前後してしまいましたが、夏に葬祭業を少しやっついて

被災地で見た光景を詠んだ歌があったので載せたいと思います。

『太陽に影をのばしてそびえ立つ学校ほどの瓦礫の山よ』

被災地の街中から瓦礫が消えてきた頃のこと。

峠を越えて見えてきたのは学校と、その隣にある学校と同じ高さの瓦礫の山でした。

『褐色に染まる杉の木見つけては津波の高さに蘇るあの日』

波をかぶった杉の何本かは塩害で茶色く染まっていました。

高い山の上の杉までもそうなっていて、再び恐ろしさを実感。

『偶さかに奪われた鼓動気付かず道にたたずむ悲しき魂

』

津波で一瞬に命を奪われた人は、自分が死んだことに気付かずに、
今も道路にたたずんでいるという話を聞いて。
本当だったら、怖いというより悲しすぎる。

『人々のくらしの痕跡ただ一つ更地の中にたたずむ石垣』

瓦礫がどかされてまっさらになった更地の中を車で走る。
目をこらすと、わずかに残った石垣や塀や家の基礎が見えて余計切
ないものでした。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0489z/>

世界に触れながら

2012年1月14日02時45分発行